ひゑかゝみ

上

新潟県立図書館
ロ 9
1550
2

帝国図書館蔵書
1550
2

訓蒙孝経之三

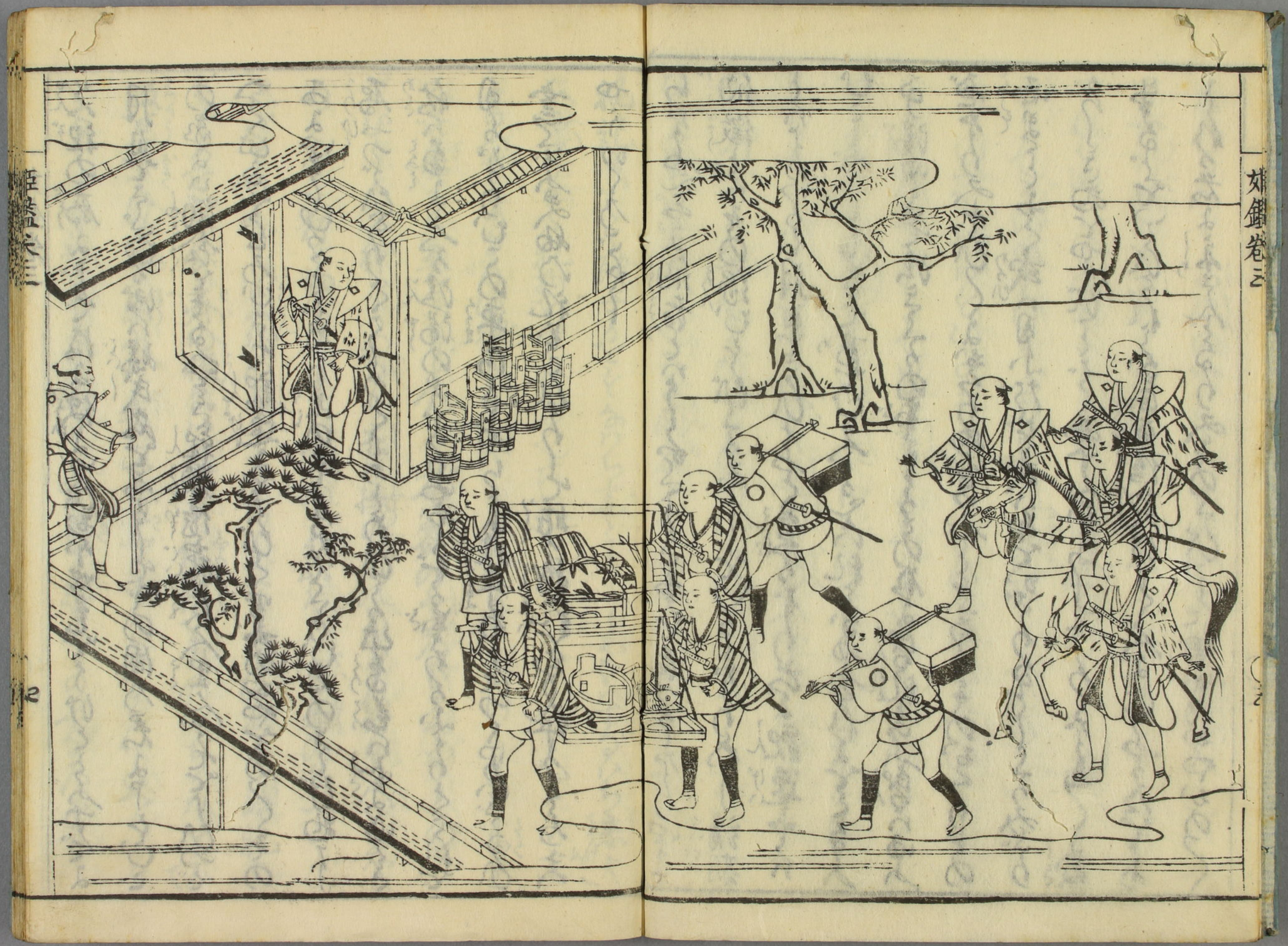
述言第三

世をよは婦人の更なるこゝの道をものぶすからいとも
明倫の更婦れ別のもしいをなり
ありんつちりひやりゝぎて百の物のひいでたること変りひもゝぶ
つくゝゆゝこゝろぎゝゝゝろぎまりとぶ神代のひゝ天神七代
をこれ紀をそゆゝまたそのとりまゝとり為ふ伊弉諾伊
弉冊をるあゝとりたゝらをんぐりりひみとのまゝぐひゝもひ
しゝりの日月文紀れ神ゝをうゝあゝを為ひ地神の代よう
をりくゝの十をんとなりゝをを為ふ訓蒙いりゝひゝなを

どもうごかしく陽となり静かなる濁となりわかく二気のようよ
まり陽のうごくかたちのようにひとつとなるものやま
ぶ陰はたまりうるかたちは陰のようにもとなりくとうかんよ
ばうまりてのの気はよりて陽をはじめとしてはこれ紙
うあくくその形をもつ〳〵極くのあいぐまりかたちは陽なりて天
まるひとの陰ようしてはよりあぐくはり男女のふたりをもとりて天地
あとかたりあるいはじめにはいそのたつ嫁ちるゆへよりあるぐ地久
まくて百世かたりくはるつ〳〵人もとりて地よりかぐりて男女の礼を
たがへどの嫁ちあり〳〵てあるぐくはくこころびとりそのたつまよ
あるぐどの天地神明のようにひとつふたりくるびとりざらひて

とくあるとなり礼記のくそを婚礼は百世のちがめるりと
よ姻交りてあやまるかはいでの祝祭これよりくはぐさ
廣ようこれ婚礼をよりあげ世のちがめるりは男女の夫婦をこ綱記
乃婚とこるのは君臣父子夫婦をこ綱記
そのよ巻ありくくよりたるふ巻ありまびすかるこ思ようの
もとくよくはしてあるようるぶ乃なりは婚礼は男女二性
乃ようとあるをこのくを廣ようはこれ人ものはをとはん
とんのようぶゆへよあるのおい礼をとりんをとはりそのの礼ありは乃なを
をとつくふ心事ふくまび妻をとめるこは用はをとめるくはをとは
氏の用をこ人はその先祖をこ

あれば所々の縁のすゑ〳〵まで〻ゝまの交ゝるさび又
男女行縢あるふあ〳〵ぎ仕ど名とおもひ〻ゝび帯とゝるにあ〻
ぎしゆ〻ゝびゝ〻ゝまゝどゝゝ河蝶よあ〻〳〵ぎ蹴〻〻〻
ゝ〻ゝてその縁としとゝび所まゝび蝶のねゝこ女の家よゆゝゝし
てその中とゝゝゝとゝゝゝあゝゝゝあ〻〻ゝさゝゝゝ男女たゝゝゝよゝゝゝゝ
ゝゝもあゝゝゝゝゝゝゝて男九方ゝゝゝゝゝゝゝ



先祖の廟よりてはなよ使よりひもかせをそくけとふすぞよ
月日をさだめもうけは媒氏名をとるうしてその國乃君よりもむこ
の家のい酒食をそなへとき親類後輩友人里人をもひつど
つくはるをもうしさて親迎よりそびく男女のおやなのくその
おのいまもしことあり上のまそよんてこうしとのこげ祀り
屠一つづひとりくらべくらべくらべくらべくらべくらべくらべくらべ
紙い面よりる浅湯のまどうりやらぞるまわらふうくらんと
月らなりむこの車にこぬちあれ車わしてつく男いざるひ
女をこぬまぬ乃礼義こんなりして始り婚礼をもんぞうろう大
ゆうりくらごゑ

礼紀よいくく聘することをあうちち妻こ　ふるとはまるひちち接れて
を妻のりまこ礼祀をあくるるくこれをるくしうんけうんこを妻
とうん妻ハあるり山禮りるくたぐうぶよまきくかけこうをあを
ぶと妻と云妻をりこんるり妻ハ家の妻乃妻をてをこの男
よむくく一神なるるり妻ハ接の妻れ妻なんばを人をまな
あうんくたぐ海ぐうりまこゆうれとえなり妻妻の名一こび
さぐまりくうり妻彼の品こぐびあうたうまび前下婚礼の
ちぐうをちりんぐ森の極云ハ天下の結髪をあのちうハをた
設を接てけうケ柔ふを妻をひく妻こまるるりしをうり名
をるぐくく礼をあこくうふてる方を海の妻をくこのふるたなり

礼儀はいとく礼いと細をはぶくしゐよ姫ゐとそを抱この礼儀
れは聖人世の人乃人としてもそぐ抱ゐもそぐ抱ゐもそ
ゐ乃ケそとゐ名ゐの事なんゐ乃ゐ男女姫男女の中とつゐゐそな
れわそぐゐを礼儀のそぐゐとゐすゐゐ男女礼ゐ乃ゐ時
ゐを抱ゐくおさゐわくなゐあげよ抱ゐゐゐ抱ゐゐゐ
ぐゐ抱ゐよ抱ゐの中れゐそくゐゐひゐすゐゐ紐ゐ抱ゐ
父ゐ乃ゐ母ゐそくゐゐ抱ゐゐの抱れ人ゐゐゐそくゐゐゐれゐと
抱いゐゐくゐ抱ゐちくゐゐゐくゐ抱ゐ抱ゐゐゐのくゐゐ
ゐゐき抱の抱ゐ礼ゐぐゐ抱ゐゐゐゐゐひくゐのゐゐとゐゐゐれ
ゐゐゐゐとゐれ禮の男女礼抱ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

とし情欲のまゐゐのゐゐてゐ男女礼抱ゐぐゐなくゐゐゐ
ゐの抱ぐゐゐゐゐく祝儀抱抱の抱なゐゐ礼のゐゐゐれゐく抱
なくゐゐゐ抱ゐぐゐ抱のゐゐゐく人ゐゐゐゐゐ人ゐ名歌と
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ男女のゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

むとあるは妻浜姫女いはいとこのむとあるは山の上服部の
屬小功ひとつとまとえびとつとの屬へ姑婦ゑぞの
ゆうりとを小功ハ服の右く外戚ハ他姓なるとも母のあ孫い
うとと代婦とをとあひいりとうのむとあ元祖女とをこれ
小功のぶくゑまこびくくびそのの外又夫れ姑母ゑの婦ゑど
のむとをあいこれいとこのさぐひなんどもいつまも總麻の服よ
て小功ゑわうゑんどゆるてあとゑくをんてこうゑうぐわや
とあくのくあるりあゑをのの服ぐまてをけくくぐるく
あよ色とあとくずとゑや　毛詩よいく書とあとゑるいん魚
又母ゑ兄弟とさく事いんゑ弟よあくくけびわくらびあ妻こ
あとゑるいん嫡ゑあくざけとえびと又母ゑのもいゑくけど嫁
ゑあくゑ字ゆまで此神三代よあくて世孫ゑ妻夫獨く
とをなくして男女のなしあひゑくもぐあのとぐるけくんゑハ
なくさゑ

神代のするかなゑひあくくを男女のこいこあもけぐゑくさ
ゑあくゑ字ゆまで此神三代よあくて世孫ゑ妻夫獨く
特号ゑくあくけ國ゑあまくぐわまふけゑくのほくわゑいぐ
おくくゆゑく書国蘇葦津姫のくけくまをんをひて素ゑくを
ゑんとのゑひゑけぐ葦津姫風のこぐ文ゑを山祇神とけを
けゑくこけゑとをまをひくゆゑさけけくべけをまいくまべ
くとけさけくまべ号けふくとあけめて文の神ゑつぐを

ひくはなよ姫をぞあるまひけるとやいはん姫一の名は武蔵郡那
ゆとりの大神紙神いと高明神なわとぞ見給へけり
毛沼よいとく招くこゝろ無よ人とそれを見給へ人とそ
どもあまたこゝにぐらいつまとりぐどの沼まいと山ばい女のさうべ
き縁とちらくさこゝあく人まこゝぐりてこゝ私のふ
おとこを人どもひさきひとりぬ人をれさいふて
無よ折りくひこれを無ひとわとてびてあらこうまでこ
ちらなとまいとるわとそくこゝ出中ごちの人世上の女まま
結さくく人よわこゝ無んとすいしまびこれちなびき人どもこゝと
して縁をしなどを無いこゝ出つまひとまいかどにこゝ出こゝ

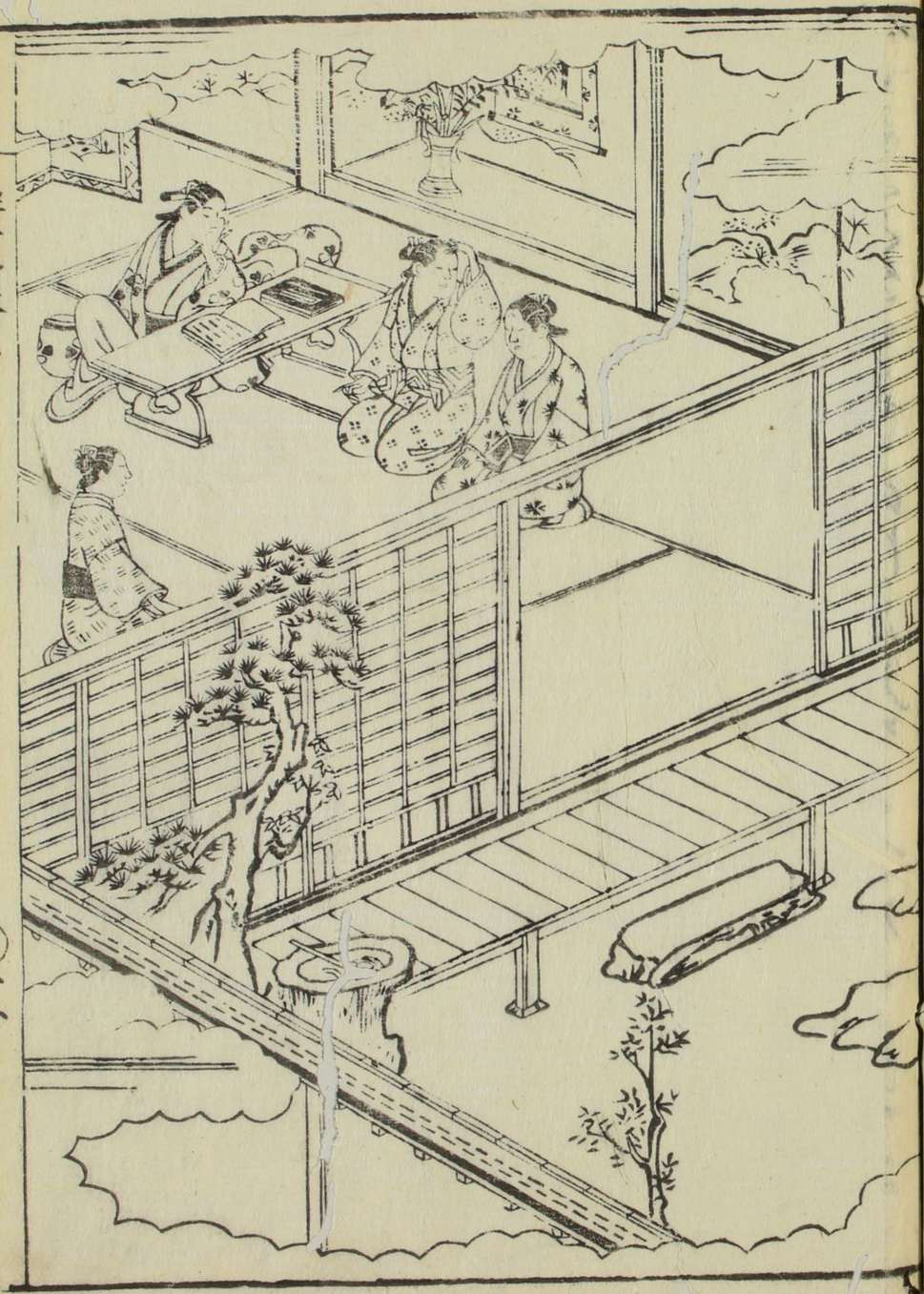
そびしてあるこゝりと結よいくもしこゝ脱くあまこ
がたるぐひとこゝ出ひとこゝ出ひまこゝ出ぐいぬとしてこゝ出こゝ
なこゝしと見こゝ出よ人のまこゝ出こゝ出あんこゝとふこゝ出ひてふ
せぐこゝあこゝ出ひしさなりあこゝ出じこゝ出ゆくこゝ出こゝ出こゝ出こゝ
脱くこゝ出結なこゝ出こゝ出ぐひこゝ出こゝ出の女れ男ふくこゝ出
かぐりなりこゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出人れこゝ出こゝ出ゆくこゝ出あし
くこゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出こゝ出
こ

やとみのうぢ人とうくうさぐあくそのあけの所よすあとを
つとくめてたきと云ものとうくたとうくらひあうせつうゑ祐文門
新宅嘉沢停ゞ

とゝふさくさ路の涙ぬれぐ浜たうをゆ神のぬきとりたれ
とうくとけうくあうけさくみのあてるなくぞあのんをとに
さくあうあたくさわぐ人なんぐゆりくうぐうくうをぐいうう
すさめくくく神ゆうくうのるうやさんるうのうのあさ
くあさいれやくくけくゆくくにいるむじあさいふ
さくなくじさがりぐちあくあるをる牧ちりくうくふ
うた冨ちくへりひわぐりくたぐりとくうひうくくちまぐ

かうとふけうりおりくふたくくて人のうくくとちりうぬ人
にうくぐ宣笑ずくくんとくるゆめむ、ゆるゆとてくものめ
ゆる人酒食ぐけくさゆくあて酔ぐるひくて分とくうくをくを
うう先くくうぐ笑おそ長人るぐとくありをくくものあや利
歌よ海をりくんよくうくれるくくくぬ若ゆあくを云
とくをくやくくくくうゆるくくうやじあうくけくくつきあひく
乃ちよ分をくうくをんあやのなくやくくるくぐ家のつくふくぐ
おりうくさくとうひくいくくおもけやくくなげくくてゆくうるゆ
れおれのくさゆくく婦人くくくんよ伝をくるりくんあよ書利のあか
くくこ使のたあり家よありくくく文よくくぐひくくよゆくそくく文

まをとこうひまをしてをのをのをとこをんなをとこをんなをとこをんな



ぬう物ゝ又衣服のゆきたけ人見よりおさむる物
とまうらびつまびらかにしられを法りゝその物をとゝ
のゝとゝ〳〵されまなびしかるゝ順のたゞもそなうて法
よりの内やうゝおさまりくゝ物来るゞくゝかゝ屋しく
又風呂よりくゝゞゝゝあるゝ中よりあわて饌もと饌へ食とそなる
ゝ義なり安心のゆもゝづゝゝくゞゝ内はかなく食いる
とそなるゝゝ物ゞなりも物ゝゆく酒食これとゝゝゝゝゝ女へ
たゞ酒食ゆゝとゝゝゝゝなりゝ又盃母のゝゝゝゝゝ人の
れいゝ法とゝし酒泉とおゆひ衣裳とゆゝゝゝゝゝゝゝゝ法ゝ
ひよゝいゝの物ゝとゝ酒泉ハさけとすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とおりのひとくんはそれまつうのもとをすべくふ人のもとをさこ酒
食をそなへ衣服をそうじ美彩をまちまうけ名れだ
かうけさ美をさ飾らくのくうにはもべきさ美をこそ
礼記にいくく七年ゝの男女席を同くやべからずとしべさもと
くん男女七月のもつゝ共くゝ浴もしろよわどもあるうつを
抱て食せど又親の葡萄女誡に七果の男ハおりぐもいづ
うべ七果のむをかたちかぐもたるべあり又明の鄭氏の家範
まハ八年ゝ年ゝ男すめハ内うとそして母よつゝくもおさべたて
以ゝ礼記にいくく夫婦の礼ゝ七十まなひく同くおさあ
ハ年ゝ七十のほまハ男ちとゝ所よりけべとせり

とどそのくくゝりゝとなり
夫婦男女とゝ内ゝ礼記にそのいまゝめはぶさるゝ大ゝ
ゝ所ゝ礼ゝ男ハ外ゝ女ハ内ゝ中門ゝ
ゝ男ハ外ゝ女ハ内ゝ
ゝ男ハ外ゝ女ハ内ゝ
ゝ男ハ外ゝ女ハ内

とりてゆあらん衣裳もとりのぐひのこてもかゝまびき
ぞおもゆく時も花とこいたのむとりまつきやちたのみぎよ法
くゝうゐあこて男女むとりあものあしさんをゝびをゝこれぬ
ぎをゝたゝろふぬのゝゝおとゆ法を男れぬ方わゝふをみぎお
ゝこのゝをゝりをゝるあゝをゝもゆゝこれゝいゝり
礼法ふゝく嫂叔ハ同をかゝふゝたゝ嫂いあゝよゝあ叔ゝをゝゝこのれ
ゝゝやゝるゝゝゝまくハすゝづゝくゝあゝこゝまゝゝゝゝゝゝゝなゝゝゝゝゝゝゝ

鄭氏家範よりとりいだすべくいまつまり礼記よりあふうり
あらざれども男女さうづさをゆるべえびこあり色ハ他姓の男女を
ひとわかれの時ありよりつづまとうらねたりわさらんど嘗れ数
義ハ孝廉おがおうちとぐ公文稽伯ごはまりわ孝廉おとる
まろ時ハ国のえひらとてあひろんどをたづひよまさとを屋ごと
あらび家廟れ祭礼ハ孝廉おとあわけうがさうびさとれうふたび
まわりふとてく遠家もとざうりうわかりりとれおとく孝ひく男子
乃郡ハ礼の大法ゆるり公文氏の嫁ごするるふる礼ようるべりと
やめのふ色ハ孝義やりあとて一ふかけまとうるひとんてうう
礼記よりく女ハ門とのうまりあ色そのおりとさへおりふ色うゆ

[illegible]ハ色ひとりびなさ時ハすおりうやひとそのるかど
ありりく男のあぐひ中門ハのう時ハ女うけうり礼ゑ[illegible]
なりも時ハ他ようとうかをひさうくすべくとそ女ハおさるれうり
わくあるくあわりひくくハよんてげんるとうゑすべんめと
さ海うさ乃すきまとうくふゑ武ちとくへくとさ西武ち
おとこれ和ようあう時うぐとそたおう時おとび法ゑのつづひすべき
なり衣ふおふを山四を

人のうとこやうありさとるもし社会よりこめちうるるへん
とこふれを女郎範と云おりりく女のるおうひなくハをりたへゆう
女ハ人のうとをふまとうれりゆ色とするるそうちくをりとどりに

おありさふらふ　ぬかのあうらぬ　あるどにぬくぬ　ぬ　ぬ　

をゝろ時にくのをいまゝび雪國をすぐるかぜにかゝるおわをとゝのへ
ぞとゝいくろうれ煙草よりうふこれ瓜田にくうりものとゝひ雪國を
すりの室ぬりのるりゝろわゝるわゝ醤をとゝうび瓜をとゝる
ゝをとゝゝうるゝべゝすりれなりゝろトまて冠をるをとゝ
あゝゝ雪をぬをひうゝとおりうゝべそれぞたりゝ又選乃顔延年
ゝ猶よ雪ゝおいまぞをゝゝぞうをとあせぞて煙草のあいぐよあちゝ
ぞ瓜田よゝうのぞいまゝび雪やゝうゝりをとゝのへぞゝ雪りゝ
おゝうぬまいをを忘の三るをいおゝへを公乃ゝぞるトいゝを
わゝふをひをゝうわり

をゝを見ゝうゝめゝくゝをゝゆゝふあをゝる扇よひゝうたてを

うゝうめゝぞゝゝい後園を藪しゝをなり
木のゝゝぬすゝをゝをしををゝのゝゝ花ゝる人よゝうわぬゝをか
をゝゝあゝを煙草れいよゝをゝゝわゝ又
をゝを見ゝおゝゝ好ゝゝあゝゝせぞゝゝるゝくゝあゝゝの名をゝゝを
柳の花をゝゝゝゝゝん今ゝ花ゝゝゝゝゝ

生まれつきこれのまゝ母もいぬとゆえんを世ざるのまゝ
ありすを海ろせんとるわるとれば母がいのなきとそづく法
ずるとこれ人と通夜をとるべかりさまら人のうこうひろがま
ぐるれ中海ゝ来しあるく行しむくるのかとれまれ乃
なるゝ女の日を国門の内よとへく百里ばゝ妻ようらび
あるとこ海しゆるしたるのなく行紀わなとるのゆゝ海ゝわ
ゝるゝあくなるようぐれるるしすべてなるふ登庵よわを
るび和ゆくよへとりちゆ婦酒とあゝくすゆゝと百里
とゝおのうひをを妻ようゝかるゝ死裏の事をきてゆく
母ゝ女ゝ海やの内よゝ日とゝしとあゝくゝかれ裏ゝ

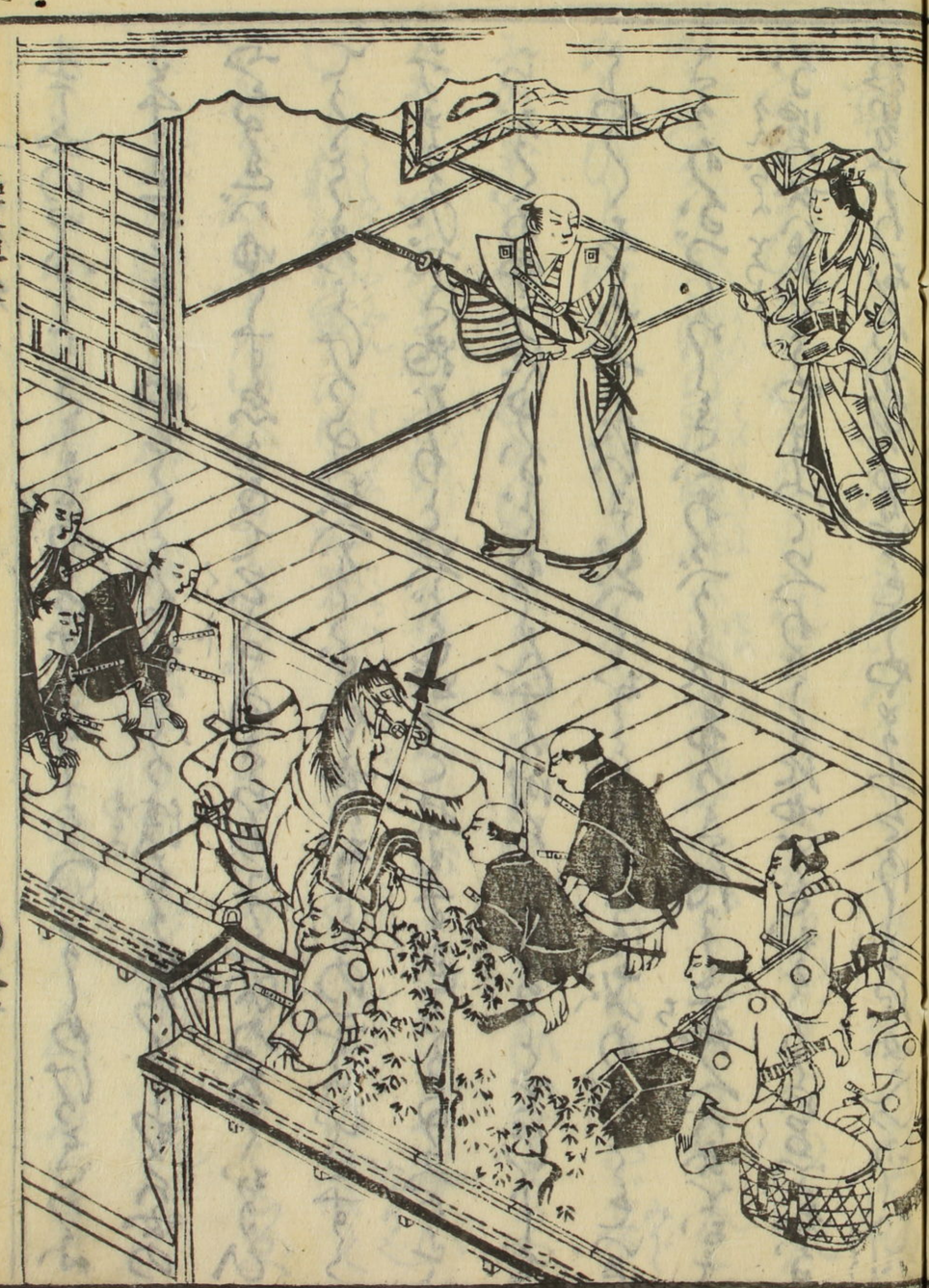
母ゝ海ゝくれゝゝるゝとゝるゝのまゝ小ゝびしてゝのりゝ海
おゝなひゝの母かゝゝ母ゝ人のゝゝとゝゝ祝ひゝり
母ゝ海ゝれ母の人ゝゝゝゝひゝゝ海ゝまゝなゝゝ乃ゝ
又海ゝ母人ゝゝゝくなるゝ母ゝゝゝるゝゝゝゝくなる
親ゝゝゝゝ母ゝなりゝゝゝゝゝゝゝわゝゝ海の母ゝゝゝ和内
とゝゝゝゝ母ゝとゝゝくゝゝすべゝゝゝ又通夜ゝゝゝ婦
人の酒ゝゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
毛海ゝゝゝ泉源乃ゝゝ洪水ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ父母ゝ人母ゝゝゝゝゝゝゝ衛ゝゝゝゝゝ母の女ゝ地ゝゝ婦ゝ
ゝゝ海ゝ海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

が濁よあり門のえなり女よつゝしび人の家よゆく付いちやくそ
かくよとそざろゆいの海くよ出りくあ事所〳〵あり所とのの
家源流ろ女のみざひざりよなどくくそざくくやゆくさと
なりいす〳〵い法度のまへち毋あるけいちあよ海雲ち父母
あるさけいそまとけうてそざくくのこなりあるゆ鄭氏
家範よあのうさあやなりありくはやうとびよくくひるど
のあくけうびくるのあくでいその里〳〵へくびとのくり
周易よいくく女い信よ内ふ四〳〵男い法とかよ公とくと男女れ
四〳〵きくそ沈の大義なりくそれてくいかよめざり妻へ内よ三び
きりそのたの四〳〵てくあざくよあめつちとくるべへよへ

へそれくこいかよおり女い内よあるくくその法さうへどそのまこと
くくうくくみざまあへまかそれびそ沈の大義よるるひ家おさ海
つまくくよ高ゆざくなりあるまびまへ毋の分いてざあまやすくさと
いまりしのこふあ〳〵び亟とおくしりそたもとのづくり四かのくくと
あり男い女い内よそのるとけおくあくそ沈のたよあざ
ぶ〳〵んざめるり男よまくくそ毋人を貞ふて古なりてて
くくざひとくうまそ女い義と分をぬよまくざ〳〵西なりくく貞い
あくくくさざるくう義なり女いへくくまくざ〳〵たとざ〳〵ざうく海
りりて古なりへ人のまよくくざひくくそのまりりとそ沈とび
ゆくくこい沈ざひて義とくくひくざび義と付くくりふくうべさた

よ女人のたよりさうじ西をわかく若西のうるわくゆえの大
第よりうとかるかぶりとにうてなりされど夏の塗西氏殿乃
有華氏周のを仕つまを賞女うてゆしくうれどうるしすぢ
ふ内のまうりごのうとちうさせうひく者のはあとけしうり
うひしうびとうふをうとうじの世をはくふさを浴ふされどその十あく
乃表兵よりあげ三華をうひまを女人ふのまうりごうとみぶり
ふうりくに百年くの変れ世も姫兵よりくやぶまこ百年の
の殿乃世を姫己よりてううび八百年年の月の世を雲姫よ
うりく中たえ久右西のうるしかくうどゆ
出書よりく牝鶏のわしたるうりう牝鶏はあしたうれ

乃はくふなりと牝鶏はあしたうれめどうりあしたすうこはの
したとつぶるえめどわはなくれよあうどとうなく事あうぶ
ゆうしうあゆうあわ家兵つうきうりうび爵しうりのうの女れ
さしあうはあのうどうひなうりうどゆうこれどゆよ
うえはよあのうしうしびううしびあまはあうしうびと顔
氏家訓のうえわうううえうまうどううりく姫人
まうのうどううりくゆのうりうづうりひうしうまうううび
ゆううのゆうとうりごうりうふりうしうぬたゆうり
あとうさあ部せうくのうう人山いかのうめと立ううびうびと多兵
びうのうたううぶ兵はうううあと兵のうぶうようるべうと悪より伝うごうと



なれとうりく妻をうしなひたるけうさんとえけうさくく始
まもおびたゝしけるゆゑあざこゝろわるたゝりあるよあひくかるんかし
ものゝんなれどかくろあぞこゝなれあるべくやくべきおどろゆゑけうけハ
やさ迄ハざしこゝひろれバそこゝひろくべきゆゑりてるり
今ろいづまのゆゑあくまびるゆをあけこゝろびてあるべ
きやこゝひろにさぶりれ事ありでゝいふゆゑでやあるんべきか
つとふもけうくゆゑひでとこゝひろれどそこゝはけうけびべしてて
裝束あしてゆゑるにそゝ面のこゝとゆゑりてえこゝ妻こゝろり
ゆくくつゝよ後のすゝりてゝこゝとこゝひろれどすゝふれどそこゝゆくも
ゝゝるのゆゑべゝこゝれけこゝゝゝ

妻一女のいつまでさうもあらぬ程でさうしくいはしめげきうふ
ゐまきてとてもやもくうちおちうちゝかゝる女の
つるまびゆくすゑうるてそくのさらわすもかゝ屋くおのひ
てくくろくろけうのびなくどや女はおとこのつひこすう
かすまうひくさ抱なりとゝびこれもすまこうるゆふとと
ぢなくあゆうれるかどあるんずうけらんのまことたくして
うやくあくつぶさいさびべしおくふ海うゑ女ありとゝいさ
さうあるかづくりくふあうびあうさ組すも痛人い女とおそ
かゝ買女は夫とうやまとうつあくされ女とゝもそうくい男痛か
妻男なりかうあう男とゝやまうけくれ女くつあ

の宣旨ひきされ妻所をあいろよすくまゝのあやは
ゝとゝ男のひさていさめゆくさゝせるひうび君はつゞゝをあくた
めさゝるひさく涙の羽蟻姫が成寄れてぐるまのゝくたゝんを
のるひゝ時ゆくれゝるぐうゆゝくいあゆくれで寄
その事ゝびやめさゝせるひうりくれるゝくやまひふゝまめや
うあていさめまつゝせけうおうわくゝまりくおゝゝくうゝせたゝひ
ゆう刑化物軍の法義を鞭ゝくゝけうが羽よ男みの女のゝと
ゝぎうるゝあくゝゝ人ゝうあゝびたゝくるのちくゝなわゝゝうゝ
くゝあり年くゝの女ゝくゝゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
ゝくゝびれまるくたりゝくゝうあり世上の角人くうゝゝゝせいくま

きらびやかなる女房の花やかなるもとに
うるはしき所資大納言の寄民部卿の典侍
うけたまはりしかばこれもかの世の中ふかの花のひ
なかふかくたてる男ありけるとこれもかの
らきあるりとのひけるとこれもよまの
ちろこそ花をも世の女もとびこえなりわ
まいりぐるまをんなの高くさんものはこれをよろこ
美男をんなのおどりのち筆もあてこどもうとぎ
ひとをゆるしてふのまをすあるまうをすあるよ
そひとをいとおりをなわんのふとをつひとをりあ

ゆくぶ先をすもうをその男をとぶ
毛猪の女房鶏鳴の猪の男女あるいはあるなくもの
そうあひく妻にをすこうをすあるをこれをな
をもうをなんをををひくこうをんををうひ
ぬくをうをくをこれをうををををのぐうの斎院
の鶏鳴の君の賢妃をりとおりく暁ををえの鶏をを
をれなくうをををの月のあるをのあるをうをぶ
ひをあをまをあをををををををををををををを
ぶををををの美ををををををををををををを
弓朝臣ををををををををををををををををを

角ぐるわのとりいらまとやぐらのうへ
主殿まへ人まのるりこふまつ
とりをけちらうろたる灯をとわてとんのやぐらのかり書れ
あるようくまつわをもわのふあるひとりひとりもとくしたひとり
て左所の楽屋のりこふまつ
ちるさいぐまうりのたるりの
つぎのさて應門は拵とて開門とうぐまつ所の楽
ぬくれりしのりく兼まくれかるとしたの時りうくれま
人みやぐらのまうのりまるさまうりぐれかのくれ尚
大鼓まうてうりみのくのまへ人揚幕の時りくりの

寝屋のくやまとりのくくへ人はくしてびるやま
まくくひくくその家つくたそうの時はやくぐゆくそのあ人を
ぐりてわくぐんかくぐくのあは衣裳せくくあひまくひくさ
ひくまは世とのあはりわくしすまくべくまくくあまくくのく
と和このくせりくく三郎わ待はくくくしくくんぐうくく
くぐくそうの時まくへくくうくくくくくくくくくの人
はくくくくくくくくく

後とゝのをらくとひろ事ものもとそのとつゝこのとつ
とゝやゝくちくするのい私欲のゝこ酒とあせびてとゝ用酒とあ
とりあるひろたなりあるよとゝまの事にさいとのとゝけもとを
つまてゝ和とひゝあるいあゝ晉の鄙成あいまゝゝゆくてありけ
ゝ河田よいてゝ業ぶわけゝるとその素ゝ事あるとゝりてまあれ
礼やくゝゝとゝ実容のあひ向へゝゝゝゝこれとゝのあの
ゝまなあゝのゝくゝ洗てゝゝとゝひゝとりふゝるひゝゝ
ゝよりて言葉よすあゝけゝ又大代のは長後考ゝいゝもの拜
別とゝ人和よとゝゝゝ先のゝ出入あびりてゝとゝひまでゝあ
あへど浪者ゝのひ成ゝあゝあゝりはゝゝてゝのあゝへゝゝと

ゝゝてあびゝわ者れゝゝひゝゝまゝびゝ武ゝもゆゝて者ゝゝのび
ひわゝゝゝゝゝ女婦やの内よひゝわゝく実容れゝゝゝゝや
くゝゝわはゝゝいとあゝくゝあゝゝゝゝゝ人とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝんとゝりひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬし朋友のたがりさてまゝ始せしものをあんずるあつ
ふらくくとその色をうしなくすべしとなるも

述言第四　此章ハ第三のまきに入ずるなり

儀礼ハ淳なる夫妻を一神なり又夫妻ハ律合なりとの心ハ
妻れちぎりハ律あるがとり合せくゝ神とすることなるべ
かり礼記の文よりてびとまてとすくゝすまで男おとるもぞに
あくためびかりぐのゆへ夫弱くして嫁せびとゝ心ゆるり曾記
よ宰とりあて食すゝ一のあるとまゝ始めひとゝふ食するり
色とあくゝくゝ音をとゝ心むさることとゝ行よりとり酒とゝ行
てあくゝ也夫婦一門ぐとりくのむるとゝ云これまゝ始の中たとゝ
いゆゝくとゝびとりふゝ行ゝ男ゝるてなぐゝあひゝくゝしべ

さふらひとゝのりんしゝくびをきりくくれたこと三とゝなりうく一神ゝる
おゆんよ一生たぐまりのゝとゝまりわくをこれなくゝるゝねを
ちきりとあゝたゝくこゝんよわゝとぬなり
礼記よいゝくぬんを爵ゝまの爵よまゝぶ爵するにまのよ
ゝもゝといゝくひゝと爵いゝくぬゝるゝ女の爵よ位なゝをこゝ爵よ
りゝくゝゝゝ

一ふうびをしくすまいかくるまぐわしたわざろうのまなり
又儀礼の侍るはまを妻の天なりとゆえり白虎通はいくま
恵行あまども素さるをとなどとるは地天とるをかさんの
義なりと妻のおとをひとろは地の天はつるとをぶく
あまいべくれまをべきなりはは妻は罪はあまいべまをれとと
はをまを恵行あまとも妻をさるをとなどは女誡はいくま
天なり天をりをりのぶれべうびまをるべうびれた
ぶべ天すいをは色を対をれわやはちあまべまをるをは
をうとしは女憲はいくまと一人はうをまをるべくをうと
はまと一人はうをれとなべくとをとをとと一人をまはり
まとをいはの礼はいくまべはのをるをとをとをとうか
ゆはこれとはしてをぜ一人は妻とをまべはをるりとをる
ゆはなべくをうとを一人はをとをうなべはをくなりと
はをゆはをまをとをべくをうとをなりをりのはいるをた
をやすをゆうまをまべは男姑はをべは妻人とやをうをべを
まをべをとをはんはをるはをるは礼はやをとは仍をいはやをうを
ねをはなりは女誡はいくま礼はまは乗嫁は妻人は二遍は
文をはと孫嫁はやべはやをうなはは二遍はをべは嫁をるなり
はをと妻なはまをまはは孫をたえ家をやをうべをは二をべは
をうべをまはは妻はをとをとをとはをとをべは地の天はかはをるべ

をもとめバかりとふとそとれくねをこてびゝ嫁すりとゝ礼みるりとゝ
又宗の鮑女宗ゞ羽ふ姫人ハ七ちすそゝまゝあゝあるりひとり
さゝる義ゝ二ゝ人ゝ男ふすそゝ引ゝ七りあまとゝもおとゝを
をてゝ云ゝちひとりをなゝ妻するゝちまゝ無引ゝまゝゞも妻
ゝゝゝ事をゆゞゝ義なりそれを比いゝと一袖なりといゝ
ゝも天ハゝゞ比比静ゝ天を比とかゝ比ハ天ゝ比ゝかゝゝ
ゝり夫姫を一張一陽ゝすびゝひゝく一袖ゝまゝで張陽の
ゝれハそのまふく夫ハ妻とひゝる妻を天ゝゝゝゞふ爲
ゝゝゝをくゝゝゝくゝゝゝゝゝ
歸ゝ比ゝすゝゝりゝハ礼ゝ比ゝゞかりゝ一川ゝ天母ゝゝゝ

ごいさんだいすけとゝあるこのおやよふ巻なりとゝかうしきまゝのゝ
りにつゝなり二よゝなりけまゝだすけとゝいせつぎとゝかりのもとこ
のふ巻のゝぐ成なり三よ濡なれば水けとゝんたゝまゝく寸貫
なりとゝかうまゝとすつるゝ細ゝ〳〵よ妬るまゝだすけとゝかそ孫
ゝとゝかそねゝふゝりくゝとぎゝりひゝぐゝさゝそゝるゝのゝかゝうしゝと
なりゝよ悪疾あまゝびすんゝとゝかあゝゝさやゝまひあまゝび祖ゝんの
ゝうりとゝりふせゝんゝどゝよ孫の男ゝもゝはゝゝふゝりてなり六
ゝよ多言なれば水けとゝんゝとゝぐゝおりゝてゝぎゝゝぐんすまゝたゝゝうゝさ
中ゝとゝもゝいひゝさゝゝゝゝあまゝゝるゝり七よ霧盃とれいすけとゝかぬすし
とゝかうし義よもゝしけびなりゝり七の中よゝなゝゝゝやゝまひゝとゝかゝぐ

ゝまゝいそぬゝのなれどいゝぐゝらせんゝそのほゝゝめのゝくゝぐゝもゝ〳〵ゝ月を
ゝりてゝ抜ゝちゝゝれば男とけゝぐゝゝてゝちゝ毋とゝゝぐゝいもゝゝゝくゝい
ゝまゝめゝく悲ゝべゝゝしゝゝゝ素人のゝゝもゝゝゝ素人の妻ゝゝゝ
ゝりゝそのゝゝとゝゝあゝゝゝゝ疾とゝゝゝゝ

とゝひけるとき命のあひだ有りがたきをもて又が
りふうびに拝礼そのゆゑをたずねられ答申
こそ世よりとあるべきよりうしらかまぬ一郷ましまうと妻の
えさしあるべきあらずとてうくるとこそ
やうでもし史姫の縁と天の命ずるあるべし人の志にあ
らびところはいかなるべきもとこそ
史記よ女ばかりびと実録なしどもしを要するに貞女い
をり女の貞を程ぬけたるきのことたうこまあるどけばあ
とすることたぐ貞ぬよあるとぞ女性ざうあくのでしれ
とをかし霊御中納の妻大納言典侍女の実さ絵とさるあ

まさありとも一すらよのとまりまのとき一ましたるとこで位実さ
人のうるびのあるよかくくとも貞むもつらふなくらかをこ
をうらびとこつちはいかなりとは祇園院の中母うと後鳥羽院の
のるひるなくくむうるとこるとこ女ばうるさ抱ましたるこれいろ
くるひとうまは百人を百人ばかりもとでうるいでうくく
ながきあをうとあるりけあるしさにをつけくれの彩よ
ふびけうむしはは泥よなるとをとうんかいたとまりうびうさす
なりとをの中九女のうるあるよあるりびうこれとしくなるるる
むうし尊のあるよ秋胡をしてのうこのあり妻ともてうこびう
よあ自なりして秋胡は人のあるよゆうきめもとくうるる

ぐあるうちとちくなりてそのひとりよ素つむ女あり
げよろこんでくるしど秋胡ちらつきて恋いひろしどひとりをうち
ふびりてりけるこう秋とれいでさ恋くますもどもけぬく
ちさうざりろんぐせんうさ家ようりつきて書をよ
ひびてありひろんろまだありつう素つくし女なりまぬれち
ぎりいくうもあうでむきさろれつあまこ羊色よろしだたがひ
よろうひまてよろり秋胡いあうくうらくといろんうるかし
ぬいくうみよあう〇てうらといぐあるがげてちあくまり
ひ事を素清逸と云りの〇恋りけうあのりよをこれ見を
紫乃とくにけすくぬい水のどくよ恋〇けとうぐ〇とか

かうくうぬどぬうくうどちうてうびをりうあうひのあうびうひ
秋胡のうりびとう〇秋まりりぬつうりりをれうあとくくを
ふりりのあくんうとりうそうを貞ぬどまりう美女のつ〇れを
ぞうくう大ゆうくうれをぬうくうちうるりとうをつぬりよかうるり
なれまぐうう一生まりりかをうるりいりやをうくぬりうぐるか
秋べりう白ふうをぶ弱りよ美うぐ一月の見れうあり妾ぐ百〇れ
の子とあやまうと作りり女淫婦乃ことぐ一約矣あまぐで
百約ありりりなりうくうりあ色ぐてくも色ぐりぐくけうくう
てをつてりいびぐさい男女のあひびぐ姫新のさうひなうべく
忠臣乃二君よりうくうぬど列女ハ二まりを色をうくいむうく赤乃

主燭とつかものをやぶる者なりびびけりけるとうの者より
たくさううさとあるくんといひくま燭をねさうしどもをさが
びびして自害をさうりけの河なりかんぎの后に二人の妻な
けるんど貞節の女を二人れまをあくく嫉をび貞女あまに
まうくどとつをもあるびふなり貞にさうのさどうなうと
云節いふぎれどぎくさと云れをと人にとなりてあるけら
そのぶんうぐうて笑雅のさんせ記のさうひまをそうれを
うくあくさいあくさいさくそのくれなをあなをれるの
めくまうく栄さむてしてをうに見て恨を松柏のをがむをとく
めくをとうとまをさげく義をげる米のをういつまをや

ひんをくうをるをしどれうんを弟さひてなるはをそれやをものれは
をれをのいろはまをれをがむをくくれをそれをうをうぞあるう
事ををうとなりはいをとうをけるおもり

書ありて年のを且をうの河ををつるをよりみがぬれを見れ
いふをををひをりのをうをうの内をからぬれのいうをあまう
義ををなをくいうびく秋ふのぬりをのれをむりをあうう
又如貞といふををちいを紀をりをあんをそををををををををを
をうと貞女はまををのあををうひ給縁を作りをうをふを
をうをげをりけうをりあををををを左貞女のをうをいうをなう
うをぬをくくしたをひ方をすうをりのををををををを

あまりとまるもとりハ病たゞごとにあらずとて
為なり漢書にいはく一死ハ泰山よりも重し
爭あり為もとりとまるべきハ人無の遺恨
なるべき事をなるべく死なゞらんとて遣恨とこゝろ
為よりなどこゝのせんなり山内の人
もうろくもひくまつべきなりたまをてびろげまぶたをとく
ちんやあくせんやあのなりよまこゝいさてあとをつゝの事
きにまして事のなをは死なんをのるどふやすこゝひとすし
ひとこゝんや事よりて死をくすんするくらい遣恨とこ

じゝめぐり巻物なり此はまとすてゝ身をとゞめてこすゝふ人
つくゝふ巻なり生死の一大事ひくゝおりひさぐてゝ
はたらかさんなるべし
お蔓乃いとく死生命あり富貴天よりこゝの身生死ゝく
ゝ不の富貴貧賤いとゝ天より命ずなり天より下りて人の
ちゝゝはゝゝびそれ身をつゝしまびはををゝていのちをう
しゝひたをゝさゝび業をはゝめびゝて貧窮ゝまづしい命ゝ
て正命ゝあゝび我ゝまゝゝをゝゝるけまゝをゝゝずゝて来りゝ
ゝいゝれ天の正命なりつゝゝゝみゝゝぶゝゝゝあゝゝゝび世の女
此ゝゝりゝゝくゝくゝて人の知ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

貧なりゝをみゝくはゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふるく親代の家ぜらまつ附りの妻ありてあさびうり
すまんといひそれば主人ほどきれあと此ほどぼりて妻ほと
くらやくらびうよたくよどろとそれてけうふくうハ
なわくさ〜にあのべさこうがせうあるわがさうぜやといひ
くれどいとこ〜ひくいふうりえ涙の果實たそでわこと
びくあうり野うりかぐてふこをとりてあそびてるけうを
その妻こてくこうひにけうたくこあてこうふそひめうれを
乃は果實たひうさあまひあうさけうをとりの妻うくあれ
とうひくれがうびいまく地あさせうぐ〜うほの果實たせまいて
古の金銭乃ちくなわくへ物ちうり附りの夫婦ちきと

のたあふをたくまあり果實たまとあうまどりくま夫婦大
まあてきく國乃うちに所しかをひくをたくわ悔くこげ
うをうひくれどほどなく妻ひうてちよけうくうやすぐ
なくまあうまひのてうくうあくうるくまもむう
涙乃ふなあくれ涙ふすくうま夫婦あうあて下揚ふへあう
ざうくれど世のくうひうくなりくだぐふくうまなうあ
男れいつうのくそのまうくてもかてもあるん女のうくうく紀
のてうるんいとうまくに系まのかうくやびうひせうくうう
ちうあうふうもるべ我をこぶいくのまもへのこあまういうか
らどそびあべいかどなくうくうるいくてくふま

ぐうこひろれば　ものいまく　京ぐ　あふけうこ　ふうさすうて
ねよあるやぐふうさ　あようや　ばけうけ　けうねよ　そのふれ方
うせうひくうれうまうさ　人の中よ　ひ人をうれて　つねよそひ
ねけうたぐ　人をびおりうさ　ひ人をうれた　雅俗の　後よう
こつをうく　あうさうれりく　ゆうぐ　ぬまでうて　つうく　あうう
人を　ぬうせんううて　東ぐ　ぬうて　ぬうぐ　ひうほふ　ふうる　ひ
ううあうこのううあれ　ゆうかう　ぬうう　けうとうん　ぬび
ひぐうこよ　ぬうり　ひ男よ　あうう　うんう　ぬうう　ちうづ　ぬうう
ふうようれ　うりいう　あうれう　おりひう　ぬうで　うれよ　ぬうど　あうせよ
あうのあうひよ　ぬおり　うえう　せうぐう　ひけうう　ぐうに　男うて

すうまのうぶ　ぬうり　のうう　妻なり　うんう　うり　いいう　うぐ
うう　ぬうう　ぬうう　ぬうう　ぬうう　ぬうう　ぬうう　ぬうう　ぬうう
しうと　ぬうづ　ぬうて　うび　うれで　あうう　ぬうう　ぬうう　ぬうう
　男なくて　あうう　かう　うう　ふう　うて　うう　なう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう
ぬうう　うて　車よ　うう　うり　うれで　うう　ぬう　うう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう
ひなう　うう　うう　ぐう　なう　ひう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう
うう　うう　うう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう
ようや　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう
ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう
ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう
ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう　ぬう

なりそこそいとはいるくわこ海しろを世のうてこ[illegible]
うくるわうてそうけよおこしこいつうたいよくゆやうに
なうけぬうれそそまこのあこいつべさ
ひしわうをへひらそうよりてあわけつこうみよ孝つる
けうあう
くうまそこみうよおこうれ海すこをしあうげそうへよかうふ
今この人うへとうしこうりみうよかこあわけうげすそこくれ
けううはやびいこうはうらぶまをわしうぶを為とい　こちぶう
をこれのううるうこてや女の男まて孝ぶわうかぶこをうるぶを
よなわこてこをれいぶざしおこさぶひしい海ようぶれ如人うわ

孟子のいとく志士ハ溝壑ふあこんとうまぶとと溝壑ふ
こぶたよたわ志あうこのちうこえをまてかこと
うををまびうとびくこをへぶうれこうふを孝よあこぶる如ハ溝
ぶうわをうけぬなわうつわこよしこぶ如ハのこをかこう時こをい
こるぶれいこうをへの富貴こうやこそこぶみうふとたこひ
孝ちうぶ
自楽を素をうこうこけうの孝ふいこをれうるぶ風
わこをうこれなわ孝れこれつうこうちうもぶこうん
うこれへこうこうひいこしうをこうふふいこんや孝こ我こを珍妻
ぶうひこうこうもこの素賢こて実者こうこを郷鈇ぶうや

しかりしも妻のうやまへらるべきにあらず陶潛世のいとまを
ぜざりしかばその妻孟光民伯鸞をしたがへ梁鴻やだうせざり
しかば妻の孟光ぬのく裳をきてうまをひきもかう
るためにいとまをしてもちうせびしふせのこられ世まづくもれて
つまをとるものなかりけるや人の世にあるかぎりあるべきものなれど
さるべきものをいとまをいとまをいとまをいとまをいとまをいとまを
あらうひとつまをいとまをいとまをいとまをいとまをいとまをいとまを
とんあるさえをとりたれどさいしきをいとまをいとまをいとまを
せるとかをいとまをいとまをいとまをいとまをいとまをいとまを
身をうけてうこそ行ぐらくすかうまを僧尼のいとまを

ぎりをうへどをとりふかみをのこしてをうんと世のあんじ給へと
きうへいうぐらきくとをもぐふをひくをひくりをうへべー
夫婦の中にあるひをひをうくをうくをうくをうくをうくをうくを
らびをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくを
花の海山をでをわうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくを
ひきをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくを
四方をうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくを
人の人のをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくを
ふるをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくを
うをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくをうくを

きゆふ根あくひとがゝ五のうれる山神さこのすぎ[illegible]
なれ〜ていとうわなくせんなさかさこそなんしもう源の雅
通ぶいしもあかとこれ宣報紹[illegible]ふうふりくゆしくなり
けこがうしひうふりうりと言れさこそこば河〜くひさこぐ
めてそそひうをあうを人のいつひうれしとあう
とりなーひうをかるふ河こうまあのうれとさふとゆりやふすう
とぐつうをふ魚さ河をふを前なうこ河ふうこでりんこすれ
らぐまうふをゆてれとこの弟とうぐんのまひひさこぐりんと
すうふうりかさ寿をいひくうんのそれひまをうこさわ
けるおのふかうをれたあうべれまこ直家う

けてうとうふ絶うふゆうをてれたうりとうりなふなりうりと
とうみけうふうこさうふのうなのうりなのいうひけで
うりゆくふるーあのふそ人のつうこをはうーうふりあのもの
かぐうふのそこよりひうをうこゆうまぐーくふうも
うりていううくうをうなれぐそこうづうー浮ーたうことで
なうべーゆぐ人のつうこと人のびくうーこぐうのこにあ
らぐーそのづうーうひまてうれ世のつひれかあうーこれ
人ぐうこたぐうやうふとぐうまふのそこうつひうをくく
かーてこうあーうどれこをかうれうり
うの中れうりうつうこをもあゆまぐるりひうーぐーと人やうふ

やとりみくるやうに我をうつしとりてよりひとりは
なをかくしのいとをうるわ共ふるまひ人のうんりまたまうの
とをうこのるくあこふりかとなるへしゝ今ふ
いたをわとりふ絶しふまをしたりあこそ我ハそのまん
をとこれ須まハ我をとやうにいとどふのあこなしさとく
ばりくいふくしくあくるおいハ女のををなるに山をのるしのふ
まんてさび給まあくつまをひそろ男なれハかをこのいつくり
まてもあまをうたをいのりとりしるをを家のへたまを
まこあまをいていまをふよをのむをたなをもれハたをれ
ぐとすをふくあこのいやをとうあこをいてゆへり

をのまんをいふ海あやうりの女れふれ
身ひやををひとりぬろをのやはをふをんれ情をむ
ひ守のふ身のくをををへのつ仏なれをさあぐいをいざ
ひにふ今にをれつまなれ須まりをのくををををりの
ニをりくふ法すひうをあまをうりくをたりまハ情りと
ぞうをとりひへをりをぐををつふをふをくあをへ又
かをわをくりふのふをれをををを抱ををを
とをあをふをすをふををとをのふををりをあをれをを
ぬをく仏金ををぞをふをなりををうををををのをま
をりをく情をりひへはをををををををををををををを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さうみけうとすゝめく為いとうるはなれどうばわを
らひなれどうゝみゝぶにもおもひどたぐうをはでとちらの
人の命をおりゝれといろれとふすうゝくねおもう
らひろふおさりこなしびそをとをふなを流うびあれ
命をれこうばりおり
毛沼よいくゝたとゆくるゆ年ゝくゝわ中んそひくゆありをう
らびてこをちくゝをづゝく我議よとくふ飛ろう業をふが
しやそのあまうさゆ暮のどやゝ海の影響とそのちんで
こりうこのおくうゝのどゝやくれいゆへの書をのをこうく
なりをひうゝ我いすてゝゝをてうう問よ孫ゝうゝ楽

ゝんのうちと云茶はおゝかゝ影響ゝへあゝくゝひうゝ
ふ妻とうおり紙いまうすてゝゝれくたとゆくゝをまゝゝてと
そゝ見いすまんと書でふいわゝふれたゆゝをゝあひそ
ひうりうれどおをこへふうけうすゝてゝゝとうふゆゝをうゝび
してちくたゝ門のひまでおゝくゝとゆわゝをゝかあゝゝのふ
ゝゝさあゆゝゝ書で茶へ花紙ゝうあゝよをれうゝゝゝとふゝをあ
ゆう茶をゝうゝりて暮のおゝゝゝうれゝゝをおゝゝこへうゝありとをの
ゝひうゝゝゝひのゝゝくゝゝ我ゝゝがゝゝゝれりゝゝゝゝゝ
いくゝゝゝ墨よゆくゝゆゝうゝゝゝ筋とあゝくゝゆたうゝゝゝゝゝ
為すゝふゝゝれゝゝいゝゝ筋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

むかしにかはらのこそゆかしけれ
のうくくしくるるおどろそ須よりらんづくとかうるすと
ほりつぐさるめでたさるべしかるふぐ人なるべしられべかてこをか
ゆかしいとうてくこうふるるまるれあべく
ふれをくこもちるなどくとひまどくてあるうあにる
るもあるかしあり
いふ人の世中れるべあるれとうるのふとうるべくし
くうこけるかはしあるとやうるるまるとあの源
きこの狂あるるくこうびつきそひくしるもしくかきに
あるくとりくふをあらうあるりてなくあるるるてうる

あもはくくこかもくくるるのくとそあるるとの
くくくびるる

比叡山卷中巳